

手紙から見えてくる
日露戦争の素顔

小説や映画に描かれた日露戦争は、軍部や軍人側からの視点で描かれることが多い。司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』も2人の軍人と1人の俳人を物語の中心に据え、明治維新以降、近代化へ突き進んでいった日本、そして日露戦争を描いている。

日露戦争当時の国民は何を思い、どのように受け止めていたのか。その詳細を知る手がかりのひとつに『軍事郵便』がある。軍事郵便とは、戦地にいる兵士と国内にいる家族や近親者をつないだ特別郵便である。河合敦氏はこの郵便に着目し、書簡に書かれた内容を読み解き、庶民目線の日露戦争を研究している。

「これは意外と知られていないことですが、『慰問状』という戦地に当たった手紙をどんどん書きなさいと政府が率先して奨励しました。軍事郵便は日清戦争から始まり、日露戦争で爆発的に増え、日露戦争ではおよそ4億通もの手紙がやりとりされました。

ではなぜ、そのように多くの書簡がやりとりされたのかというと、理由はいくつかあります。まず、百万単位の兵士が中国で戦っていたという事実。それから兵士の士気高揚を狙ったこと。政府は、日清戦争で得

た経験から、家族の写真や手紙が届くことによって、兵士の士気が高まることを明確に意識していました。これが、軍事郵便の最大の目的だったのではないかと思います」

当時、軍事郵便を国内のポストに投函すると、戦地に届くシステムが整っていた。一方、戦地には『戦地郵便局』が整備され、兵士が出す郵便はすべて無料で送ることができた。ただし、日本から兵士に当てる郵便は有料で、その収入が兵士の郵便料金に当てられていたという。できるだけ多く郷土から手紙を送ることによって、この運営経費を賄うことができるため、どんどん手紙を出すようにと政府が積極的に奨励したと考えられている。

「兵士からの手紙には、自分宛に手紙をたくさん送ってほしいと懇願している内容を見かけます。兵士の間では、手紙の送られて来る量によって、その人の価値が高まる風潮があったらしく、手紙の量が兵士のプライドになっていたようです。だから来なければ恥ずかしい。ある小隊長の手紙には部下の建前上、代筆でも構わない、たった一行でもいいから手紙をたくさん書いて送ってくれと頼んでいるものがありました。つまり、手紙の内容もさることながら、量そのものが重要視されていたことをうかがい知ることができますのです」

日露戦争を戦い抜いて
勝利した日本

日本兵を支えた

祖国との手紙のやりとり

今、明治以降の戦時下における軍事郵便の研究が

研究者の間で静かなブームとなっているという。

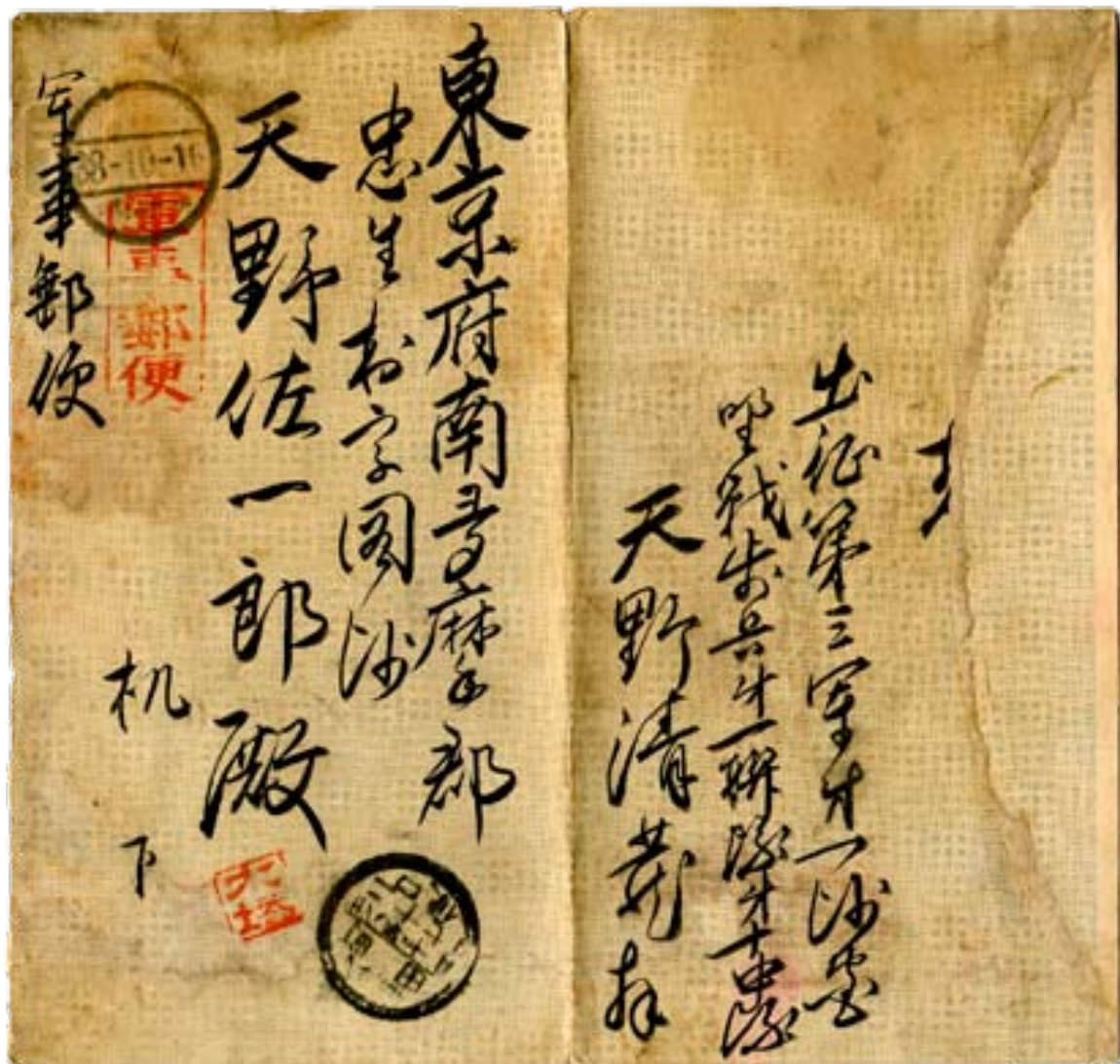
そうした研究を通じて、日々新たな事実が明らかにされている。

テレビでお馴染みの歴史専門の河合敦氏は、

日露戦争における軍事郵便や慰問状の研究を行っている。

軍事郵便に記されたもうひとつの日露戦争像について語っていただいた。

インタビュー
河合敦



軍事援護や銃後活動を中心に研究している河合氏。このような兵士の手紙や郷土から兵士に送った慰問状などを研究し、それで修士論文を書くほど、日露戦争について調べ上げている。

日露戦争において、やりとりされた『軍事郵便』は4億通にもものぼった



「日露戦争を調べ、深く知ることは私のライフワークなんです」という河合氏。日露戦争に関する著書も出版している。

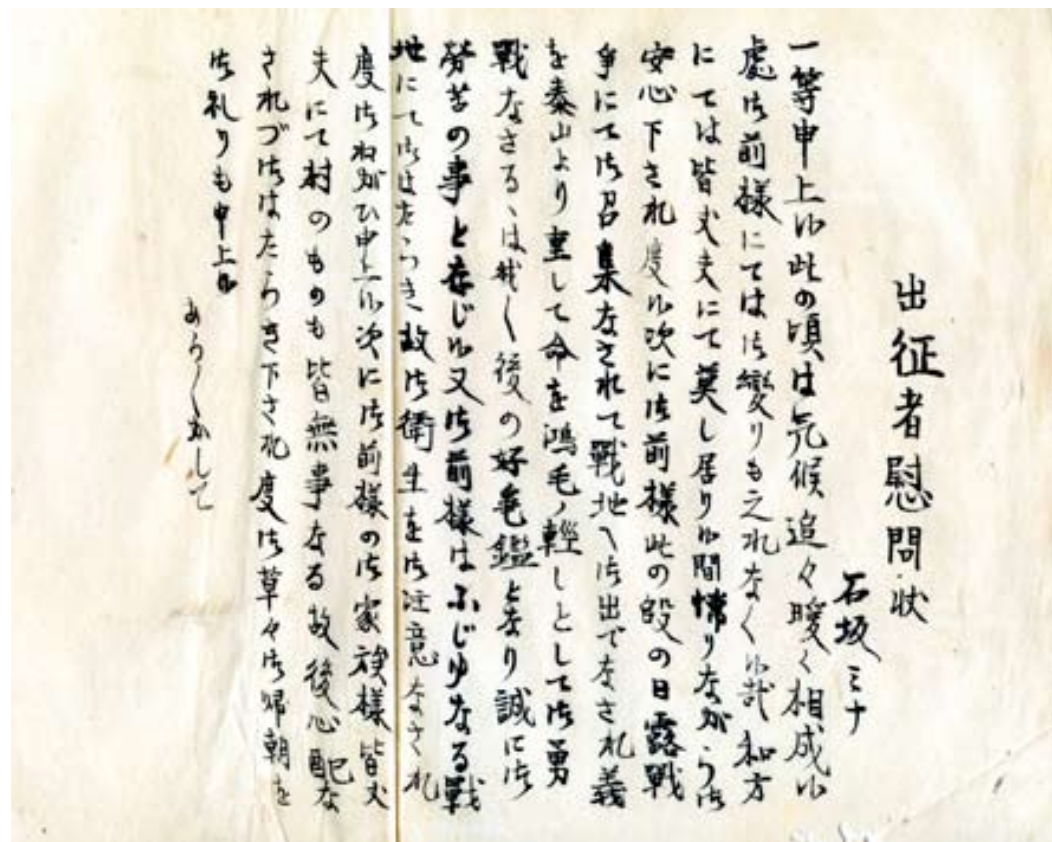
兵士からの手紙には、『正義の戦い』『東洋平和』という言葉が、よく登場すると河合先生は指摘する。「興味深いのは『生物向上のためには戦争は致し方ない』といった言葉が、たびたび手紙の中に出てくることです。ちょうどこの頃は、チャー

戦場の兵士の士気を鼓舞したもので、兵士から手紙には、『正義の戦い』『東洋平和』という言葉が、よく登場すると河合先生は指摘する。「興味深いのは『生物向上のためには戦争は致し方ない』といった言葉が、たびたび手紙の中に出てくることです。ちょうどこの頃は、チャー

ルズ・ダーウインの『種の起源』（1859年）が出版され、進化論ブームが巻き起こります。その進化論にこじつけて、日本は進化の過程にあつて、戦争は進化の過程の一つなのだという考え方を真剣に信じていたようですね。当時の世相を大きく反映している好例と言えます。また、『文明国の戦い』という言葉も多く見受けられます。自分たちは文明人なのだから、文明のための戦争をしていると」

無論、すべての兵士が高い志と意識を持って戦っていた訳ではない。中には、公然と戦争に対する政府や軍部の無策ぶりを批判する手紙、戦争自体を批判している手紙も少なからずあつたという。ところが、そうした批判に対し、政府は検閲することもなければ、言論を封殺することもなかった。

「意外かもしれませんが、やりとりされていた手紙の検閲はほとんどされていなかった。これも、最近の研究で明らかになってきたことですが、これまで、戦時下では検閲で厳しく取り締まられていたため、自由にものを書くことができなかったと考えられてきましたが、日中戦争まで、抜き取り検査が中心でした。日露戦争はもつとゆるくて、本当に政府がどうしようもないとか、こんな条件で講和を結ぶなとか、兵士が注文を



戦地へ当てた手紙は、兵士が引き揚げの際に荷物になるからと捨てておくことが多く、数が非常に少ない。これは、下書きを大切にしていたため残っていた貴重な書簡である。



出征兵士から家族へ送られた書簡の数々。

故郷のゴシップまでも手紙に添えて

軍事郵便は、国内から兵士に送られた手紙と、兵士から郷土の家族や近親者に送られた手紙とに分けられる。兵士に当てた手紙は、家族や親族、出征地の関係者、兵士を激励するため学校が児童に書かせた慰問帳などがある。

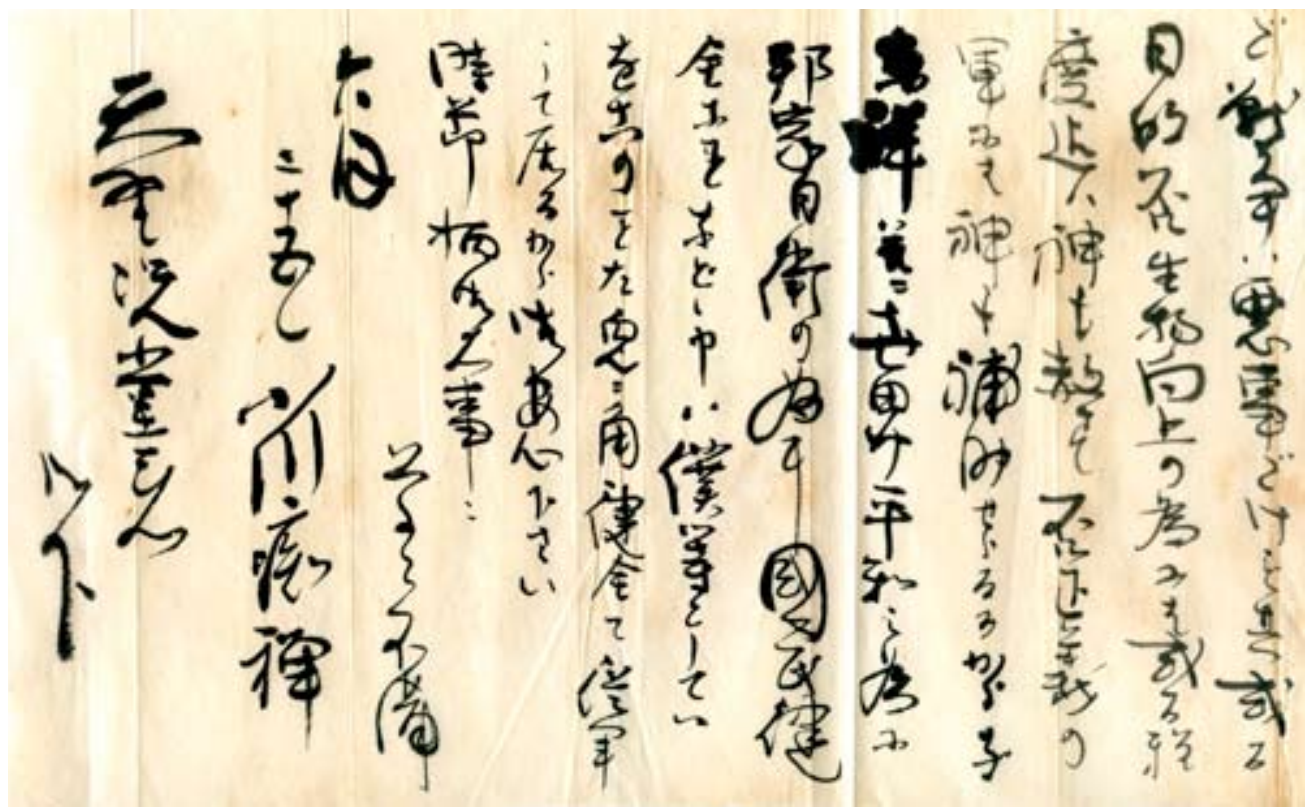
「これも最近の研究で明らかになったことですが、日本国内の新聞が手紙と一緒に送られています。戦地の兵士は、自分が何のため、どういう作戦に参加しているのか、また現在どこにいるかさえ、わからないこと

が多かった。それで、戦争の全体像や世論の動向を教えるため、送られていたと考えられています。

また、東京府の今という教育委員会みたいところが、各小学校からの慰問帳を募集しています。子どもたちに、不特定多数の兵隊さんを激励する手紙を書かせ、それを送るわけです。そして、その手紙の返事が来ると教育界の雑誌や新聞に載せ、子どもたちがそれを読んで、また手紙を送るというやりとりがなされる。子どもたちはそうしたやりとりを通じて、兵隊さんたちが頑張っている姿を理解し、自分も将来大きくなったら軍人になりたいと考えているようになる。教育の面でそのような利用がされていました」

では、それらの手紙に書かれた内容はどのようなものだったのだろうか。「日露戦争で戦っているのは、ほとんどが農民兵士でした。だいたい徴兵検査で合格するのは、体のしつかりとした農村出身者がほとんどで、手紙の内容も作柄状況や農村内での出来事などに関するやりとりが多く見受けられましたね。それから村の噂話などもけっこう書かれていて、例えば未亡人なのになぜかお腹が大

兵士たちは「生物向上のために戦争は致し方ないもの」と本気で考えていた



戦地から送られた兵士からの手紙。2行目に「生物向上の為」という一文が書かれている。

つけるといった具合に、自由にも
を書き、発言できる時代ではありま
したね」

戦争へと導いたのは マスコミと国民の世論

「当初、政府自体には戦争する意思
というのはまったくない、『日英同
盟』にしてもロシアに対する牽制の
意味で結んだだけであって、陸軍大
将の桂太郎や陸軍大臣の山県有朋に
も開戦の意思はありませんでした。」

ところが、国民がどんどん主戦論
に進んでいってしまったのと、ロシ
アがいくら交渉しても言うことを聞
いてくれず、『滿韓交換論』を提案し
てもうまく行かなかったわけです。
国民が主戦論に傾いていったその背
景には、潜在的なロシアに対する恐
怖感があつたと思います。それは、
常に日本が感じてきたことであり、
日清戦争のときに『三国干渉』で、
せつかくもらった遼東半島を取られ
てしまったという恨みに加え、遼東
半島だけでなく朝鮮半島にも勢力拡
大を図りどんどん南下してくる。や
がて日本にも来るだろうと考えられ
ていました。

しかし、開戦より半月くらい前、
実はロシアが妥協しているんです。
最終的な局面でロシア側が韓国の支
配権を日本に認め、満州の利権の一
部も認めるということを正式に決定

すから……」

日露戦争に勝利した 日本人の心中とは

開戦から1年余り、両国は多くの
犠牲を払いながら次第に消耗し、日
本海軍戦において世界最強を誇った
バルチック艦隊を壊滅させ、日本は
事実上の勝利を納めた。しかし、日
本側も戦死者8万4000人、14万



戦地ではヌード写真や下図のような春画も売
られていた。そうした写真を同封したり、文
章を書いて日本へ送った兵士もいたという。

していました。でも、それは日本に
は伝わらなかった。なぜかという
多々説があつて、途中でロシア側の
主戦派の人が止めたとか、日本側が
電信線を破壊していたため伝達でき
なかったとか言われています。本来、
日露戦争は必要のない戦争だったと
主張する研究者も多くいます」

外交で回避できたかもしれない対
ロシアとの緊張関係が戦争にまで発
展せざるを得なかった。そこには、
マスコミの影響が大きく関わってい
たのである。

「新聞の論調が大きく影響したと思
います。この時期は、ちょうど大正
デモクラシーの走りの時期で、国民
の声によって政府が動かされること
もしばしばありました。マスコミは、
大衆に迎合することで部数を伸ばそ
うと、国民が素直に思っていること
を書き立て煽つたということです。
当時、非戦を唱えていた新聞もどん
どん主戦論に変わっていききました。

例えば『萬朝報』という新聞は、
最後まで非戦を唱えていましたが、
結局主戦論に転換して幸徳秋水や堺
利彦といった社会主義的な人たちは、
そこから出ざるを得なかった。また、
知識人も政治的な発言をするように
なり、東大の七人の博士が強硬な主
戦論を政府に『七博士意見書』を提
出したりしています。その様子を伊
藤博文は、学のあるバカほど、恐ろ

人もの戦傷者と国家予算の7年分に
相当する20億円を費すこと。そして、
アメリカの仲介によりポーツマス条
約を締結した。ところが、国内では
この条約を巡って『日比谷焼打事
件』が勃発し、戦勝祝賀ムードとは
まったく逆の状態だった。

「ポーツマス条約において、日本は
戦争に勝利したにも関わらず、賠償
金を1円も取れなかったことが、多
大な犠牲と我慢を強い
られてきた国民に大い
なる失望感を抱かせる
結果になりました。そ
して、公然と政府を非
難するようになりまし

また、その怒りの矛
先は世論を煽り立てた
マスコミへと向かい、
この焼き打ち事件では
新聞社もターゲットと
なりました。新聞社は
部数を伸ばしたい一心
で煽りに煽り、国民は
その論調に酔って、ど
んどん主戦論に傾いて
いきました。どちらに
非があるとは言いがた

しいものはない」と言つて、主戦論
を煽る知識人を痛烈に批判していま
す。

伊藤は比較的戦争には消極的とな
っていますが、最も消極的だったの
は明治天皇でした。最後の最後まで
戦争はしたくないとお考えだった
ようで、最終的に決断する段階では
伊藤に相談し、決断したときには涙
を流したとさえ言われています」

日露戦争が始まった1904年、
与謝野晶子の詩「君死にたまふこと
勿れ」が『明星』に発表され、話題
を呼んだ。当時の世論は、主戦論一
辺倒だったのだろうか。

「兵士の関係者は皆、生きて帰っ
てほしいと思つていたのでしょね。
戦争当初は、戦地で頑張つてこいと
書かれていた手紙も、近親者の中に
一人でも戦死者が出ると手紙の書き
方が変わつて、無事に帰つてきてほ
しいとか、お守りを送ろうか、とい
つた内容に変わるんです。なにせ8
万人以上の人が死んでいますから、
どの村からも戦死者が出て、当事者
の心境は変化していききました。こ
ろが、それ以外のほとんど大半の国
民は近親者の死と無縁だったため、
どんどん戦えという意識が強かつた
ようですね。中には、旅順要塞で戦
っている自国の兵士に当てる、早く
旅順を落とせ」というような厳しい
内容の手紙を送る人もいたくらいで

のですが、お互いに作用し世論が形
成されていったというのが本当の姿
だと思えます」

地方の農民や一般の人々の当時の
日記を見ると、『日比谷焼打事件』に
関する記述を書いていない人はいな
いくらい、国民の怒りは全国隅々ま
で行き渡つていたという。

「その後、目標を失つた国民は放心
状態となり、農村は荒廃。破産をす
る人も続出しました。帰還兵は不平
等感、戦争に行かなかつた人は劣等
感を互いに抱くようになります。村
というコミュニティ自体に、戦争は
大きな亀裂を産んでしまった。その
後、荒廃した農村を立て直そうと、
社会主義や共産主義思想が入り込ん
でいきます。それが、やがて大正デ
モクラシーへと繋がつたです」

あたかも当時を彷彿させるような
今の時代だが、マスコミが果たさな
ければいけない役割とは、本来、当
時の軍事郵便のようなことなのかも
しれない。国民世論を政府に正しく
伝え、迷走する政治を動かす人民か
らの手紙という位置づけこそ、これ
からのマスコミが担う使命とも言え
るのではないだろうか。

かわい。あつし

1965年、東京都に生まれる。早稲
田大学大学院修士課程修了(日本史専
攻)。第17回郷土史研究賞優秀賞(新人
物往来社)、第6回NXTトーク大賞優
秀賞を受賞。東京都立白鷗高等学校で
日本史を教えるが、多数の著書を
執筆している。「世界受けたい授業」日
本テレビ、「雑学王」テレビ朝日などテ
レ出演も多数。

近代史の語り部 河合敦のラインナップ

その優しい語り口調と、的確
なポイントの提示で、さまざま
な歴史をわかりやすく解説する
と評判の河合氏だが、彼の専門
は近代史のなかでも「日露戦争」
だということを存じだろ
うか。とくに、本文で取り上げ
た軍事郵便や慰問状に関する研
究を、日本でもっとも得手と
する研究者である。近年になつ
て当時の資料が見つかったため、
現在、さまざまな事実を解明す
ることに尽力している。

こうした熱意ある研究の集大成
ともいえるのが、彼がこれま
でに発表してきた著書。ここでは
改めて2冊の書籍に注目した
い。左に掲載する書籍は、いず
れも近代史で、とくに日露戦争
を大きく取り扱つたものだ。
これまでに明かされてこなかつ
た事実や、新たな発見が凝縮さ
れ、知らなかつた日本の歴史を
振り返ることができる。
NHKスペシャルドラマ『坂

の上の雲』と共に、ぜひ手に取
り読んでもらいたい書籍のひと
つである。ほかにも「世界一受
けたい日本史の授業」、「世界一
おもしろい日本史」、「世界一
房」、「岩崎弥太郎と三菱四代」、
『幻冬舎』、「江戸のお裁き」(角
川学芸出版)など多数。



戦争で読み解く日本近代史

NHK出版新書 903円
アメリカ、中国、韓国、イギリス、
ロシアの五国との関係に焦点をあて、
日清・日露から太平洋戦争まで、外
交のひずみがかどのような形で戦争を
引き起こしたのかを見ていく。
戦争を背景として、どのような推
移で、竹島問題から北方領土問題へ
と発展したのか、これらまでの問題も
分かるお勧めの一冊といえる。



ドラマチック日露戦争

ソノバシラ新書 703円
運命の日本海海戦で、ロシアが誇る
バルチック艦隊を全滅させるとい
う空前絶後の大勝利を取めた日本。
その撃滅作戦を編み出した秋山真之
を筆頭に、秋山好古、正岡子規、東
郷平八郎、与謝野晶子、高橋是清な
ど、日本の近代化に大きな貢献をし
た立役者たち13人の波乱万丈な物語
を追う衝撃の真実が満載。

日本人の心を支えていたのは、戦争に勝利したという自負心だけであつた